

茂原市史編さん

事業の活動

（近世史調査その一）

No.4

現在の茂原市域には、地域の歴史文化を伝える古文書などの歴史資料が、質・量ともに豊かに伝えられてきました。それだけではありません。どんな内容の古文書がどこにどれだけ伝えられてきたのか、誰でも把握できるような整備が進んでいることは、茂原市の特色ともなっています。

それは、『茂原市立木 高橋家文書目録』（1991年）の刊行以来、『茂原の古文書史料集』1～21（1994～2016年）が継続的に編集・刊行されて、主な文書については活字化されて読める環境が整えられ、市内外の旧家等に伝えられた古文書の目録（リスト）が作成・公表されてきたからです。その間に実施された、『千葉県史』編さん事業でも、茂原市域の古文書等は重点的な調査が行われ、主要な古文書の目録化・活字化が一層進展しました。



▲上永吉千葉家での史料調査

現在行われている茂原市史編さん事業でも、こうした蓄積を引き継ぎ、その延長線上に、『茂原市史調査報告書』第1～6集を刊行、史料に基づいて地域の歩みを再検討する作業を進めてきています。

これら長年の取り組みにより、一見、古文書などの史料から読み取れる地域の歴史は、ほとんど解明され尽くしているかのようにも思えます。しかしながら、そうではありません。実は、膨大な史料が発見されてきているだけに一層、内容が未解明の史料が数多く

残されているのです。今回の市史編さんでは、こうした状況を踏まえて、新たな史料の掘り起こしを進めると同時に、かつて調査された史料の再調査と再検討にも努めています。

により、千葉氏の診療活動と地域住民との関わりが浮かび上がってきました。ここではその一端として、三代東玄の80件に及ぶ診療記録である「病印録」（安政3～明治元年）の内容を紹介しましょう。



▲「病印録」（千葉家文書F-19）

の生活圏を越えた地域からの人々でした。また、患者が以前受診した医者名が記されるなど、医療の選択肢も複数あり、何度も繰り返し受診する場合も少なくなかったことも見えてきています。江戸時代は、思いの外、地域医療が充実し、多くの人々がその恩恵にあずかっていたとも見られるのです。他の診療記録と併せて分析を深めれば、より正確で多くの事実が浮かび上がることでしょう。コロナ禍で問題となった地域医療のあり方を考えることにもつながる事実だと言えます。

今回の『茂原市史』編さん事業では、こうした豊かな質・量を誇る地域の近世史料を後世に伝えるべく、前回の市史編さんでは刊行に至らなかった資料編を含めて、充実した内容の市史刊行に向けて取り組みを進めています。

茂原市史編さん委員会
編さん委員長 小関 悠一郎

一例として、昨年、二日間 にわたる史料調査を行った上 永吉の千葉家文書についてご紹介しましょう。同家は、「永吉の眼科」として有名で、眼科初代の東寿（一七七四～一八五四）以来、地域の眼科医療を担ってきたことが知られています。『永吉の眼科病院』をはじめ、『ふるさとの文化財』2・3、『茂原の古文書史料集』3・5、『茂原市史料』4・14下・15下・17・19・21等の文献で、診療活動や村の運営への関与の様子が明らかにされてきたのです。

この記録を診療の受け手である地域住民に視点を合わせると、次のような点が見えてきます。まず、患者の年齢は、十歳未満が9名、十代12名、二十代11名、三十代11名、四十代6名、五十代2名、六十代4名。性別では、男性32名、女性39名。当時の庶民は年齢や男女にかかわらず医療を受けていたことになりました。さらに、患者の居住地は、下総国や西上総の村々が25名以上で、約三分の一の患者が当時

問合せ
美術館・郷土資料館
TEL (26) 2131 FAX (26) 2132